

## ・今年度の研究成果の公表状況

### <自己決定とQOLプロジェクト>

論文：

坂本真紀・武藤崇・望月昭(2003):「養護学校における自己決定支援パッケージの効果に関する検討」. 行動分析学研究, 18(1), 25-37.

吉岡昌子・坂本真紀・武藤崇・望月昭(2003):「聴覚障害と知的障害がある個人における動詞・目的語2語文の獲得と一般化の検討」. 立命館人間科学研究, 6号, 55-66.

濃添晋矢・南美知代・望月昭(2004印刷中):「聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールを使用した「おつかい行動」の獲得」. 立命館人間科学研究, 7号.

関本正子(2004印刷中):「聴覚障害者に対する効果的なコンピュータリテラシー・トレーニング開発の試み」. 職業リハビリテーション. 17巻.

学会発表：

濃添晋矢・南美知代・望月昭(2003):「聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールの使用 - 鉄道駅における「駅名報告行動」獲得の検討 - 」. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, p.576.

南美知代・望月昭(2003):「重い知的障害があるろう者の携帯メールの使用 - メールによる地域店舗での要求充足(物品購入)行動の獲得」. 日本特殊教育学会第

41回大会発表論文集, p.705.

金山好美・望月昭(2003):「ADHD児における選択機会を用いた集団遊び参加の支援」. 日本行動分析学会第21回大会発表論文集, p.76.

安井美鈴(2003):「慢性期失語症者のQOLの向上を目指す積極的行動支援について」. リハビリテーションのための行動分析学会研究会公開シンポジウム、「リハビリテーションに現場における積極的行動支援」

### <臨床社会学>

福祉サービスの第三者評価の上記の公開講座は、ミネルヴァ書房から『京都の福祉サービス評価の現状と課題』(仮題)として中村ほか編集により2004年7月頃に刊行予定である。

中村「臨床社会学の可能性」(『家族とアディクション』日本嗜癡行動学会誌、第20巻第4号、2004年1月)

### <対人援助学の理論・方法・歴史 QOLサブプロジェクト>

サトウタツヤ・高砂美樹(共著)「流れを読む心理学史」 有斐閣 2003年10月

学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ7を刊行予定

### <家族プロジェクト>

論文：

「配偶者からの暴力の加害者更生に関する調査研究」(内閣府男女共同参画局・2003年4月)

「DV - 加害者対策からみえてくること」『現代のエスプリ』第441号、2004年3月)

「ドメスティック・バイオレンス - 加害者対策」(『家族心理学研究年報』家族心理学学会、2004年6月)など

学会報告:

「第20回日本家族心理学大会シンポジウム報告」

#### <子どもプロジェクト>

論文:

高木和子「子育て支援をめぐる『支えあいの輪』の機能 - 子どもプロジェクトにおいて核となる概念の位置づけ -

松岡知子「保育所における一時保育を利用した母親の意識調査」

吉本朋子「育ち合う個と集団の相互作用過程 - 子育てサークルの親を中心に - 」

高田薫「共同問題解決過程としての子育て: 他者に頼ることで生じる人との付き合い」

春日井敏之「不登校の多様化と支援ネットワーク - 「父母の会」を中心に

津止正敏「障害をもつ子どもの放課後・休日の実態 - 京都障害児放課後・休日の実態調査から -

櫻谷真理子「今日の子育て不安・子育て支援を考える ~ 乳幼児を養育中の母親へ

の育児意識調査を通じて」

高木和子「24時間保育から考える これからの子育て・子育て」

#### <臨床教育プロジェクト>

研究論文:

中川吉晴「『教育における霊性』について」『トランスパーソナル心理学・精神医学』Vol.4, No.1

中川吉晴「ソマティックスにおける『からだとスピリチュアリティ』」『人間性心理学研究』21巻1号

中川吉晴「感情変容の臨床教育学」『立命館人間科学研究』7号

中川吉晴「ホリスティックな観点から見た教師教育」『教育文化』13号

共著:

中川吉晴 日本ホリスティック教育協会編『ピースフルな子どもたち』せせらぎ出版

学会発表:

中川吉晴 ラウンドテーブル「非暴力の教育」教育哲学会46回大会

#### <バリアフリープロジェクト>

論文:

Higashiyama, A., & Shimono, K. Mirror vision: Perceived size and distance in convex

mirrors. Perception & Psychophysics, 2004 (印刷中)

東山篤規. 身を守り実在感を与える皮膚

感覚 . GPnet(ジーピーネット) , 50(1),36-39.2003年 .

東山篤規 .精神物理学実験入門1:恒常法と極限法による閾値の測定 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 5(2),125-130, 2003.

東山篤規 .精神物理学実験入門2:ウェーバ・フェヒナーの法則と判断の原理 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 5(3), 195-202, 2003.

東山篤規 .精神物理学実験入門3:信号検出理論とその応用 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 5(4), 253-260, 2003.

東山篤規 .精神物理学実験入門4:サーストンの関節法とステープンスの直説法 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 6(1), 31-38, 2004.

学会発表:

東山篤規 .触重力方向の恒常性(2):触的アウベルト効果 .関西心理学会第115回大会発表論文集 , p. 32 . 2003年 .

山崎校 , 東山篤規 .視覚系と身体系による歩行運動での時間・距離・速度の知覚 .関西心理学会第115回大会発表論文集 , p. 35 . 2003年 .

山崎校・東山篤規 .(2003年7月). 視覚系と身体運動系による歩行運動での時間・距離・速度の知覚 .日本視覚学会2003年夏季大会抄録集(湘南国際村センター) , p.219.

東山篤規 , 古賀一男 .ロール(横揺れ)運動をする身体の数値 , 移動範囲 , 移動時間の知覚 .日本心理学会第67回大会発表論文集 , p. 448 . 2003年 .

對梨成一 . 階段の水平踏面が傾いて見える現象について(4) 段のつくる斜面と坂のつくる斜面の比較 . 関西心理学会第115回大会発表論文集 , p. 34 2003年 .

對梨成一 . 2 階段の水平踏面が傾いて見える現象について(3) 仮想面における横断成分の知覚 . 日本心理学会第67回大会発表論文集 , p. 455. 2003年 .

對梨成一 . ゆがんだ階段錯視: 見かけの傾きに及ぼす横断成分と視点の高さの効果 .大阪交通科学研究会平成15年度研究発表会 . P. 17-18. 2003年 .

学会発表(予定):

對梨成一 2004 坂道錯視: 遠方の坂の見かけの傾きに及ぼす遠坂の形と手前の坂の効果 . 第37回知覚コロキウム(発表予定). 2004年 .

<ライフデザインプロジェクト>

論文:

津止正敏・藤本明美・斎藤真緒『子育てサークル共同のチカラ - 当事者性と地域福祉の視点から - 』文理閣、2003年5月

津止正敏・立田幸代子「障害をもつ子どもと家族の放課後・休日の実態 - 京都障害児放課後・休日実態調査から - 」立命館大学人間科学研究所『立命館人間科学研究第7号』、2004年3月

津止正敏・津村恵子・立田幸代子『障害児の放課後白書 - 京都障害児放課後・休日実態調査から - 』クリエイツかもがわ、

2004年3月

津止正敏・足立陽子『学生とボランティア』立命館大学人間科学研究所、2004年3月(予定)

<高齢者プロジェクト>

論文:

吉田甫・大川一郎・土田宣明 2003 痴呆を伴う高齢者に対する認知リハビリテーションの効果に関する予備的研究, 立命館大学人間科学研究, 6, 1-9.

土田宣明・大川一郎・吉田甫 2003 高齢者を対象とした認知リハビリテーションの試み(1)-MMS と FAB による効果の検討 -、日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 298.

大川一郎・土田宣明・吉田甫 2003 高齢者を対象とした認知リハビリテーションの試み(2)-日常生活への効果の検討、日本心理学会第 67 回大会発表論文集、299.

Yoshida, H., Okawa, I., Tsuchida, N. et al., 2004 Effect of Communication in Learning Therapy : Psychological Research, Second International Symposium for Learning Therapy.

<ヒューマンファラシー研究会>

論文:

Oda, M. and Isono, K. (2003) Impression of facial expressions with asynchronous movement of facial parts. 26<sup>th</sup> ECVF. PERCEPTION, 32, Supplement,

174.

北岡明佳 (2003) 動く錯視の分類 電機通信大学大学院・IS シンポジウム - Seeing and Perception. 10, 67-71.

Kitaoka, A. and Ashida, H. (2003) Phenomenal characteristics of the peripheral drift illusion. VISION, 15, 261-262.

Kitaoka, A. (2003) The frame of reference in anomalous motion illusions and ergonomics of human fallacy. Ritsumeikan Journal of Human Sciences, 6, 77-80.

北岡明佳 (2002) 錯視の Awareness とクオリアを考える 基礎心理学研究, 21, 69-73.

星野祐司 (2003) 再認記憶におけるファン効果の概念依存性: 干渉とメンタルモデル 立命館人間科学研究, 5, 155-169

星野祐司 (2002) 関連語の学習による誤再生とリスト構成: ブロック提示条件とランダム提示条件の比較 基礎心理学研究, 20 105-114.

松田隆夫 (2003) 知覚判断における「基準」の多様性とヒューマンファラシーの諸相 立命館人間科学研究, 6, 67-76

大中悠紀子・竹澤智美 (2002) 画像上の人物に対する絶対距離と相対距離の知覚 立命館人間科学研究, 4, 9-18

Yoshida, H. and Kawano, Y. (2003) "Logic of children" and "logic of subject matters": Effect of an instructional

intervention on understanding ratio concepts based upon children's informal knowledge. Ritsumeikan Journal of Human Sciences, 5, 145-154.  
吉田甫 (2002) 関係推理と量的推理・割合概念の場合 立命館人間科学研究, 4, 1-8.

吉田甫・大川一郎・土田宣明 (1992) 痴呆を伴う高齢者に対する認知リハビリテーション研究の展望 立命館大学人間科学研究, 4, 77-98

森友紀・八木保樹 (2003) あいづちを用いた聞き手による偽装 立命館人間科学研究, 6, 43-54

学会発表等における口頭発表:

北岡明佳: 6件 尾田政臣: 3件

松田隆夫: 7件 星野祐司: 1件

八木保樹: 1件

<ボトムアップ人間関係論研究会>

論文:

佐藤達哉 (編) 2004 『ボトムアップ人間科学の可能性』 至文堂 現代のエスプリ

<人格発達と教育研究会>

論文:

高垣忠一郎・春日井敏之編 『不登校支援ネットワーク』 かもがわ出版、2004年。  
(初版 3000部) なおこの中で、高垣忠一

郎は「セルフヘルプ・グループとしての『親の会』の意義」、「学校における教師とスクールカウンセラーとの連携のあり方」を執筆。春日井敏之は、「不登校の多様化・複合化と支援ネットワーク」、「居場所づくりとかかわる主体の成長」を執筆。29名の執筆者が共同して刊行した本書は、「父母の会」「小中高等学校」「地域の居場所づくり」で、内と外に開かれたネットワーク支援を志向しながら、不登校の子ども・青年などと関わってきた京都府下の取り組みをまとめたものである。ともすれば対立傾向にある三者が、共同して出版した類書はこれまでにない。高垣忠一郎「思春期の子どもに『自己肯定感』を」京都教育センター編『季刊ひろば』136号、2003年。

櫻谷真理子「今日の子育て不安・子育て支援について考える - 乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて」立命館大学人間科学研究所『立命館人間科学研究』7号、2004年。

春日井敏之「不登校の多様化と支援ネットワーク - 『父母の会』を中心に」立命館大学人間科学研究所『立命館人間科学研究』7号、2004年。

春日井敏之「教育実践と学校カウンセリングの可能性」斎藤稔正・林信弘編『教育人間学の挑戦』高菅出版、2003年。

春日井敏之「中学生の心の内側をどう見るか - 弱者を攻撃する弱者の危機」『生活教育』656号星林社、2003年。

春日井敏之「多様化・複合化する現代の不登校問題 - 子どもの自立と求められる支援」京都府少年補導協会編『補導だより』264号、2003年。

春日井敏之「大学改革の時代に - 現代の学生をどうとらえるか」高等教育研究会大学職員フォーラム編『大学職員ジャーナル』6号、2003年。

## ・今年度の公開講演会・シンポジウム等の開催状況

4回の公開企画をはじめとして、プロジェクト主催の多くの公開企画やワークショップを開催した。企画は課題に関する幅広い関心を物語るように、遠方からの来訪者をも含み、いずれも、学内外の研究者・院生・学生、現場の実践者、当事者や幅広い市民の参加を得て、盛況であった。